

中国人母親の育児不安と 幼稚園機能に対する認識

——「寄宿制」と「全日制」幼稚園児の母親の比較——

石 晓玲・桂田恵美子

問 題 と 目 的

一人っ子政策や改革開放政策の実施，市場経済の導入により，中国社会は大きく変化した。こうした社会変動の中，伝統的に子たくさんであった中国の家族構造が変化し，たった一人の子どもを養育することになった現在の親たちは，今までとは違った子育ての困難さに直面している。そうした中で近年，子育てや親子関係の問題が懸念され始めている（孟，1998）。最近になってようやく，幼稚園の機能を生かし「親子園」⁽¹⁾を設置したり，大学から幼児発達の専門家を招いて一般市民に育児に関する講演をしたり，地域における乳幼児期子育て支援活動が活発になされるようになってきた。しかし，実際子育てに当たっている中国の親たちは，どのような感情や意識を持って子育てをしているのか，子育てに関してどのような心配や困難を抱えているか，という親の心理的側面からの支援は欠けていると指摘できる。

子育てに関する心配や困難は，日本では育児不安として研究され，母親の育児不安は子どもの発達へ悪影響を及ぼすことが指摘されている（服部・原田，1991）。そして，一般的に育児不安を規定する要因は，親が感じるストレスやサポートの不足であることが理解されている（牧野，1982，1985）。また，育児不安の本質を，女性の自己実現と育児との拮抗から生じるものと捉え，今日の育児困難状況を理解する視点として，女性の自己成長という観点も提示され

ている（柏木，2003，2006）。この視点に立てば現代の子育て問題を解決するには、育児の社会化の充実が一つの方向性として考えられる。

育児の社会化の典型的な事象例としては、中国の寄宿制幼稚園が挙げられる。中国では3～6歳の幼児向けの正式な教育機関として幼稚園があり、全日制幼稚園が一般的な形態である。全日制幼稚園での幼児の在園時間は一日に8～12時間で、日本の保育園の時間体制に相当する。これに対し、寄宿制幼稚園は、幼稚園機能と育児機能を兼ね備えたものであり、一般的に月～金曜日は幼児が園に宿泊し、教育のほか医療や生活面の世話も行われている。建国後に、一部の特別なニーズのある家庭のために設立されたものであり、文革大革命中に広く一般の人にオープンし、その後は縮小して行った。しかし最近では、英才教育を特色とする園も現れブームとなっている。中には幼児が2ヶ月に1回しか家に帰らないというのも少なくないと言われている。経済成長に伴う競争・核家族化・祖父母による過保護な養育などの社会状況と相まって、このような寄宿制幼稚園は一部の人々のニーズに合致し、今では内陸部まで浸透してきている。しかし、中国の寄宿制幼稚園をテーマにした心理学的研究は今のところわずかである。Wang & Thomas (1995) が「寄宿制」・「全日制」・「未入園」の4～6歳の子どもの知能を、WPPSI を用いて比較した結果、言語性・動作性・総合点のすべての得点に有意な差が見られた（寄宿制＞全日制＞未入園）。しかし、これらの差は主に親の教育水準に規定され、必ずしも育児形態の違いによるものではないことが示されている。また呉・邹（1995）は、「寄宿制」と「全日制」の幼稚園児の愛着関係（Q-ソート法による）を調べた結果、親子間、園児と教師間の愛着安定性のいずれにおいても、「寄宿制」と「全日制」との間には有意な差が見られなかった。このような数少ない研究は、子どもに焦点をあてたものである上に、寄宿制幼稚園の影響については、明白な見解を示していない。また、「寄宿制」や「全日制」幼稚園を利用して親に関する研究は皆無である。

一般的に、子どもの発達において、家庭は重大な影響を与えるとされている。親の養育態度や養育行動が子ども、特に幼少の子どもの発達全般に与える

影響が大きいことについて数多くの研究が報告されている。例えば、乳児期の母親の子どもに対する否定的愛着感が連続性を保ちながら、養育行動と併せて幼児期以降の子どもの問題行動の発達に影響を及ぼすことが明らかにされている（菅原，1999）。また、母親の養育態度や行動を背後から規定する要因，すなわち母親自身が認知している社会的文脈は、現実の母子関係に対して養育行動以上に大きな影響を及ぼすものである（大日向，1988）。母親自身が抱える育児の負担感や悩みは子どもに対する認知的歪みをもたらすだけではなく、虐待的行為に直接結びつくことが明らかにされている（中谷・中谷，2006）。従って、寄宿制幼稚園の子どもの発達を論じるには、子どもだけに焦点を当てるのではなく、家族や家族を取り巻く社会状況を視野に入れ、特に母親の心理的側面に着目し検討すべきだと考える。

近年、日本では女性の社会進出が著しい。多くの女性は、「仕事も」「育児も」という二重役割を背負うことになっている。しかし女性の就労と保育機能についての研究は、アメリカでは国体制で研究に力を入れているに対し、日本では社会的関心が高まってはいるが、実証的研究が蓄積されていない現状にある。従って、男女共働きを定着化・日常化している中国において、女性の就労と幼稚園選択に伴う母親の心理的側面を、「寄宿制」と「全日制」の比較を通して検討することは、これからの中国の幼児教育の方向性および育児支援に何らかの示唆が得られるだけではなく、日本の女性の就労と育児の社会化を考える上にも重要な意義を持つことであろう。また、前述したように母親の視点から寄宿制幼稚園についての研究がまだなされていない現段階において、母親の実際の声を聞くことは重要であると考ええる。

以上のことを踏まえ、本研究では、子育て期の中国人女性は育児経験をどのように体験し意味づけているのか、また、異なる幼稚園形態をどのように捉えているのか、に焦点を当てインタビュー調査を行った。そして、「寄宿制」と「全日制」幼稚園児を持つ母親の回答の比較により、中国における育児不安と就労に関連する幼稚園機能を質的データを用いて明らかにすることを目的とした。

方 法

対象

本研究は、中国の母親の育児不安および寄宿制幼稚園と母親の就労の関係を調べる目的に沿って、対象地域として経済活動が活発な江蘇省常州市が適切だと考え選定した。常州市は長江の中下流に位置し、総人口は **334** 万で、市内人口は **81** 万である。調査対象者の選定に当たって、子どもの発達や母子関係に影響を及ぼすと考えられる保育の質による影響（小林，**2000**）を除くため、「寄宿制」と「全日制」の両方を有している同一の幼稚園に依頼した。この幼稚園の「寄宿制」では、幼児は週に **1～2** 回家に帰ることになっていた。また、**1** 学期の費用は、「全日制」より「寄宿制」は **1** 千人民元（約 **1.3** 万円）ほど高くなっており、差は小さい方であった。

幼稚園の協力の下で、幼児の年齢・性別、保護者の属性に関して、代表的なサンプルを選定するよう、かつ「寄宿制」と「全日制」の両群がマッチするよう各々 **10** 名ずつ抽出した。対象となったのは、いずれも一人っ子を持つ、両親がそろった共働き家庭の母親である。幼児の平均年齢は **4.7** 歳であり、母親の平均年齢は **31.9** 歳、父親の平均年齢は **33.6** 歳であった。また母親・父親の学歴は、中卒から大学院修了までという範囲であった。

面接

対象者に面接の目的、内容を説明し、同意を得た上で、中国語による半構造化面接を行い、その内容を **IC** レコーダーに録音した。面接は同幼稚園の静かな個室で行われ、事前に具体的な質問項目および注意点をまとめたチェックリストを用意し、主に質問の漏れチェックや特徴があった会話の記録に用いた。面接に際しては、自然な会話の流れを妨ないように努めた。なお、面接および面接で得たデータをテキスト化するための中国語から日本語への翻訳はすべて第 **1** 著者によって行われた。

質問の構造

質問内容は、子育てに関するもの、幼稚園に関するもの、属性に関するものの三つのブロックから構成されていた。子どもの年齢・性別を確認した上で、「出産から現在の幼稚園入園まで、昼間の子どもの主な養育者は誰か」から質問を行い、さらに今までの子育て経験（寄養⁽²⁾経験を含む）や母親自身が感じた育児不安（心身両面の育児負担感・困難感および育児へのネガティブな感情・認知）の内容を尋ねた。さらに、幼稚園の機能を明らかにするために、入園前後の子どもおよび母親の変化、幼稚園への満足度などを質問した。最後に家族成員の年齢、学歴、収入、職業を尋ねた。

分析方法

得られた 20 名の母親の録音データから、個人の質問項目別一覧表を作成し、テキスト化した。カテゴリーの分類は KJ 法を用いて行った。本研究の目的や詳しい内容を知らず、かつ日本語が堪能で中国語がネイティブである人に、育児不安があるかないか、入園後の子どもや母親の変化についての評価がポジティブかネガティブか、という大まかな分析軸を与えカテゴリー分類してもらったところ、一致率は 96.4% という高い数値が得られた。一致しなかった内容は合議の上で決定した。なお、数量化可能な属性などのデータは、SPSS 14.0 を用いて分析を行った。

結 果

家族背景などに関して

子どもの年齢・性別、父母のそれぞれの年齢・学歴・職業・収入のデータを数量化した。また、職業については父母のうち一方が自営業（個人経営者）であるかどうかというカテゴリー変数も作成した。さらに、寄養経験の有無、祖父母による育児サポートの有無、育児サポート源は母方祖母であるかどうかといった変数も加えた。これらのすべての変数について、「寄宿制」と「全日制」

の2群間の有意差検定を行った。その結果、有意差が見られたのは、親の職業であった。父母のうち的一方が自営業である家庭は「寄宿制」に多かった、 $\chi^2(1, N=20)=5.50, p<.05$ 。有意傾向が見られたのは、父の学歴、育児サポート源、寄養経験の有無であった。「全日制」においては父親の学歴が大卒以上のものが多く、 $\chi^2(1, N=20)=3.20, p<.10$ 、また子どもが入園するまでは、「全日制」の場合は育児サポートが母方祖母に頼りがちであり、 $\chi^2(1, N=20)=3.33, p<.10$ 、「寄宿制」の場合は子どもが寄養された経験者が多かった、 $\chi^2(1, N=20)=3.53, p<.10$ 。ほかの変数においては、両群間に有意な差は認められなかった。

育児不安に関して

母親が感じている育児不安については、「なし」・「あまりない」・「あり」・「アンビバレント」の4つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーの定義、「寄宿制」・「全日制」の頻度数、回答の具体例をTable 1に示した。全体の70%が何らかの育児不安を感じていると回答し、そのうち55%がはっきり育児不安があると答えた。そして、育児不安の内容は大きく分けると、「ファミリー・ワーク・コンフリクト」・「孤立育児」・「子の難しさ」の3つに分類された。「寄宿制」の母親が感じている育児不安は上記の3つの分類に分散されているが、ファミリー・ワーク・コンフリクトを挙げた人数が一番多かった。「全日制」の母親が感じている育児不安はファミリー・ワーク・コンフリクトだけであった。「寄宿制」においても「全日制」においても育児不安はファミリー・ワーク・コンフリクトに集中していることが示された。

幼稚園に関して

寄宿制幼稚園を選択している母親は、現在の自分たちの状況を考えると「寄宿制」を選ぶことは、自分にとっても子どもにとっても最善な選択だと全員が認識し、10名中9名(90%)が母親の提案で「寄宿制」に入れたことを語った。しかし、そのうちの3名(30%)の母親は入れることに対して「気にな

Table 1 母親の育児不安の分類

カテゴリー	カテゴリーの定義	具 体 例
なし [2/4]	子育てが楽しいと捉えている	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがすきだから、煩わしさを感じない、子と一緒にいると楽しい。 ・負担を感じない、子と一緒にいることは当然楽しい。
あまりない [0/1]	サポートを受けており、育児負担はある程度軽減されているが、子育てにおいて、何らかの不安全感が残っている	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てについては、まあまあである。祖父母が（世話を）分担しているから、子どもを叩くことが一切ない。しかし、しつけや教育は（祖父母に）任せられない、溺愛するから、注意しなければならない。子どもが打たれ弱いというところが心配になる。
あり [6/5] F-W コンフリクト [3/5]	仕事と育児の衝突による育児困難や親の否定的感情	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の仕事・勉強と子どもの教育との間に、時間的、精神的な衝突が生じ、子どもへの悪影響について悩む。社会競争からの圧力を感じる。親が昇進して、さらに忙しくなったことが子に悪影響を与えるのではないかと心配している。 ・子どもが比較的煩わしい。夫婦とも教師をやっているから、仕事からのプレッシャーが大きい、家に帰ってから、体力がついていかない、子が泣くと、イライラする。学校では他の子を体罰できないが、自分の子なので体罰してしまう。十何年教師をしてきて、ますますクラス管理が難しくなっている。
孤立育児 [1/0]	孤立育児から生じる焦燥感や心身不調	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが煩わしい。歩けない頃、ご飯つくる間も抱っこする。子どもが泣き虫で、なにもできない。そのイライラで夫に怒り出す。夫が仕事で忙しく、子育てがしたくてもできない。自分一人で子の面倒をみるのは本当に我慢できない。日々ご飯を作って子に食べさせる。体力がちっともない、眠たいだけ、自分ひとりだけ（子育てしているの）だから。
子の難しさ [2/0]	子どもと関わることの難しさから生じる育児困難	<ul style="list-style-type: none"> ・子は躾しにくいのが気になる。どうしたら、話をきくの。話を聞かない、一回本気で叩くと、その後は何でも聞く。いくら言い聞かせても、聞いてくれない。仕方ないときは叩く。
アンビバレント [2/0]	主観的に子どもをすきだと認識するが、親自身が育児に対して否定的感情を抱いている。	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが好きだから、煩わしさを感じない。自己実現よりは家庭が大事である。自分に能力があり、（自分の）母親を養っている。家庭の経済条件からいうと、仕事に出る必要はないが、出産の時は虚しく、寂しく、我慢できなかった。自分で自分を養いたいし、出産後3、4月で仕事に出た。

注. [/] 内は寄宿制／全日制の順に該当人数を表している。

る」、「できることならそばにおきたい」、「今の自分は能力・体力もなく仕方がない」と申し訳ない気持ちを述べた。

入園後の子どもの変化・母親自身の変化についてカテゴリー分類した。それ

Table 2 入園後の子どもの変化の分類

カテゴリー	カテゴリーの定義	具 体 例
ポジティブ評価 [9/8]		
学習・知識 (1/2)	学習を通じて知識を得ること	・たくさん学んだ ・知識を吸収
礼儀・思いやり (3/2)	挨拶など人に対する配慮や礼儀ができている	・基本的な礼儀, 知らない人にも挨拶できるようになった ・近所の子と比べ, ずっと物事がわかるようになった ・思いやりが出てきた
強さ (1/1)	自信が持て, 強くなること	・強くなった ・自信が増した
交友 (3/0)	交友能力の形成	・交友能力がアップした
関係性の良さ (0/4)	ほかの子とも仲良くなる	・みんなと仲良く関わるようになった
生活能力・習慣 (8/1)	生活能力や良い生活習慣が持てること	・生活能力がアップした ・ご飯前手洗いなどの良い習慣が身についた
性格の改善 (3/8)	内向から明朗な性格になること	・性格がだらかになった ・内向的な性格が改善した ・活発になった
幼稚園への慣れ (0/3)	幼稚園のことをすきになっている	・日曜日でも幼稚園に行きたがる ・家でも先生のまねをする
集団からの影響 (0/4)	集団生活から受ける良い影響	・集団の名誉を感じる, 守るようになった ・他の子と比べて, 自分もよくなりたいと思うようになった
アンビバレント評価 [1/0]		
	子どもには心配があるものの, ほかの子と比べれば, 良い方だと認識している	・一人でボーとするのがさらにひどくなった, 将来はもっと内向的になるのではないかと, けれど全日制の子よりもよりはだらかになっている
ネガティブ評価 [0/2]		
	集団生活から受ける望ましくない影響	・ほかの子のまねをして, 自己中心的な主張をするようになった ・入園してからしゅっちゅう病気になる

注. [/] 内は寄宿制／全日制の順に回答人数を表している。
 (/) 内は寄宿制／全日制の順に回答頻度数を表している。

ぞれのカテゴリーの定義, 「寄宿制」・「全日制」の頻度数, 回答の具体例を **Table 2**, **Table 3** に示した。**Table 2** が示すように, 入園後の子どもの変化について, 全体の **85%** がポジティブな評価をしている。どのような点を評価しているかを見ると, 「寄宿制」では, 「生活能力・習慣」, 「交友能力」が頻繁に挙げられ, 「全日制」では「他の子と仲良く」, 「集団からの良い影響」, 「幼稚園への慣れ」が頻繁に挙げられた。両群に共通した点は「性格改善」, 「礼儀・思

Table 3 入園後の母親自身の変化の分類

カテゴリー	カテゴリーの定義	具 体 例
ポジティブ評価 [5/0]		
生き生き (3/0)	親の心身面での回復	・楽になって、体力回復しいきいきしてきた
夫婦関係 (2/0)	夫婦関係の促進	・夫婦間感情良くなった
親子関係 (1/0)	親子関係の促進	・子と会うと、前より親密になり、この感触はいい
ネガティブ評価 [2/5]		
体力悪い [2/3]	体力の悪い状態	・仕事がつい、体力がついていかない ・子どもの教育と仕事の両立で疲れる
子への感情 [0/2]	子どもの煩わしさ	・(入園後) 子どもと離れる機会ができて、子どもが煩わしく感じるようになってきた

注. 変化を感じた母親 12 名について分類した。残り 8 名は変化を感じなかったもので、除外している。

[/] 内は寄宿制／全日制の順に回答人数を表している。

(/) 内は寄宿制／全日制の順に回答頻度数を示している。

いやり」,「学習・知識」,「強さ」であった。また、アンビバレントな評価をしているのは「寄宿制」の母親だけであり、ネガティブな評価をしているのは「全日制」の母親だけであった。

Table 3 が示すように、入園後の母親自身の変化について、ポジティブな評価をしていたのは、全体の 25% で全て「寄宿制」であった。その内容は、母親の心身面での回復および家族関係が促進されたことであった。ネガティブな評価をしているのは全体の 35% で、「全日制」の方が多かった。「寄宿制」・「全日制」が共通している内容は、体力の減退であり、「全日制」の母親だけに見られたのは、子どもに対する否定的感情であった。

さらに、幼稚園への満足度に関して、両群とも教師の質・教育レベルについておおむねポジティブに評価しているが、「満足および非常に満足している」(寄, 4 名; 全, 8 名)・「比較的満足している」(寄, 5 名; 全, 1 名)・「改善して欲しい」(寄, 1 名; 全, 1 名)という結果であった。「満足および非常に満足している」を満足度高群とし、その以外は満足度低群としてカイ二乗検定を行ったところ、有意な傾向が見られ、「寄宿制」より「全日制」の母親の満足度がより高かった、 $\chi^2(1, N=20)=3.33, p<.10$ 。

考 察

本研究の目的は、寄宿制と全日制幼稚園児を持つ母親の比較により、中国人母親の育児不安および就労に関連する幼稚園機能を検討することであった。それらの点を明らかにするために、同一の幼稚園から「寄宿制」・「全日制」の園児を持つ母親を抽出しインタビュー調査を行った。その結果、「寄宿制」・「全日制」の両群における相違点や共通点が示された。

まず相違点の一つとしては、親の職業が挙げられる。「寄宿制」の子どもの親は少なくとも一方が自営業である比率が「全日制」より高かった。調査となった地域は、改革開放の方針が打ち出されて以来郷鎮企業⁽³⁾が盛んになり、後に個人財産が法律上保証され、郷鎮企業のほとんどは個人経営によって行われるようになった。個人の自営業者は、農村部から市内への階層移動が可能になり、経済面では、市内のサラリーマンより豊かになっている。一方、高スピードで経済発展を進めている中国においては、個人経営者が受けている市場競争からの圧力が少なくなく、家族全員で精いっぱい仕事に当たることにならざるをえない場合が多いと考えられる。今回の結果からは、このような階層移動中の家庭の職形態により生じたニーズは、寄宿制幼稚園の選択に関連する重要な一因になっていることが伺える。また、「全日制」の子どもの父親は、大卒以上の学歴を持つ者が「寄宿制」より多かった。今回、対象となった家庭の父親の平均年齢は 33.6 歳であることを考えると、大学を卒業して就職したのは約 10 年前に当たり、当時はまだ大卒はいい就職先、いい社会的地位を手に入れることが可能な時代であった。つまり、「全日制」を選択しているのは、安定した社会的地位や収入を得ている家庭が多いと考えられ、この点は「寄宿制」と対照的である。

親の職と学歴だけではなく、子育ての仕方にも「寄宿制」・「全日制」の両群に違いが見られた。「寄宿制」の場合は、入園までに子どもが寄養された経験を持つ者が多かった。子どものために、子どもの発達にとって一番いい子育て

条件のところは預けて育ててもらうことは、寄養に出す親の根本的な考え方であり（陳，1999），この心情は寄宿制幼稚園に入れることにも共通している。すなわち，寄宿制幼稚園がブーム化され，受け入れられたのは，寄養という歴史的・文化的要因が背景にあったと言える。しかし，最近の中国においては，養育における母親重要論や母性美化の思潮が徐々に浮上し，寄養への批判も見られる（王，1999）。そんな中で価値判断を行い寄宿制幼稚園を選択していることは，特にほとんどの場合は母親の提案で選択を決定しているという今回の結果を考えれば，母親の個人差に目を向けなければならない。「全日制」の場合は，子育てサポート源を子どもの母方祖母に頼りがちで，原家族（実家）との関係が近く，サポート源は固定している傾向があった。一方，「寄宿制」の場合は，父方祖父母を含んだ拡大したサポート源を持ち，「いつ誰が子育てのサポートをするかは都合のいい人に」という流動的な方式をとっている。このような母親の関係性への持ち方の相違が幼稚園形態の選択に関連があるのではないと思われる。また，入園後の子どもの変化として交友について取り上げた際，「寄宿制」の母親は「交友能力がアップした」という言葉を使い，子どもの社会性の発達を個人の特性と認識することに対し，「全日制」の母親は「みんなと仲良く関わるようになった」という周りとの協調性という捉え方をしているという微妙な差が見られた。しかし，「寄宿制」あるいは「全日制」を選択した母親の間に，関係性への捉え方の違いが確実にあるのかどうかについては，更なる研究が必要である。

「寄宿制」・「全日制」両群の共通点としては，育児不安が挙げられる。全体の7割が，何らかの育児負担や困難を抱え，子育てに対するネガティブな感情を有していた。この結果は，母親の79.4%が子どもを負担に感じるという最近の日本の大規模な調査結果（厚生労働省，2002）とほぼ一致している。育児不安の内容を見ると，職業上での競争からの圧力を感じている中で，自己実現と子育てとの間に時間的・体力的な葛藤を強く感じ，悩んでいるというファミリー・ワーク・コンフリクトが主なものであった。柏木（2003）のいう「育児（繁殖）と女性の自己成長とが拮抗する状況が先進諸国に人類史上初め

て生じている」ことが、現在の中国にも起こっていると言える。インタビューしたある母親が答えているように、経済的には仕事に出る必要はないという状況で、意識レベルでは子どもが好きで、自己実現より家庭を大事にしたいとしながらも、家で子育てに当たると、「虚しく、我慢できない」ことになる。このような母親の心理は、先進諸国の母親が体験する育児への焦燥感（渡辺，2000）を表しており、日本で注目されている女性の「あせりと迷い」（伊藤，2003）にも通じている。つまり、母親自身のアイデンティティの発達には、自己犠牲的に子育てに専念するのではなく、自分らしさを確認する時間の確保や活動の実践も必要であるという指摘（岡本，2003）が中国にも当てはまると考えられる。

一方、女性の就労に関して中国と日本で異なる点は、建国後の中国女性は自分の能力で自分を養うことは当然であると考え、夫に養ってもらうことに「恥」さえ感じることである。これは中国の男女平等の概念の重要な一部を構成している。と同時に、中国では、程度の差はあるとしても日本と同様に子育て、特に就学前までの子育ては女性が担うものと考えられている。最近のエリート志向の中国では、幼稚園に入ると、知識だけでなく、あらゆる面で「スタートラインで抜け出す」という競争意識が強まりつつある。そうした中で父親が家庭教育から離れる傾向が進行しており（孟・李，2001），母親の子育て負担は増大している。一方で、母親自身も重要な仕事を任せられる働き盛りの年齢にあり、自己啓発しなければならない状況となっている。例えば、上海では親自身が仕事後に勉強に励む「学習型家庭」は4割にも増えており、将来は約6割になると見込んでいる（上海統計局，2003）。こうした背景から、中国においては、母親のファミリー・ワーク・コンフリクトが深刻化していることが推察できる。それゆえに、今後中国の育児支援においては、母親の就労と育児の両立をサポートするという視点が必要不可欠であると思われる。さらに、少数ではあるが、子どものしつけが手に負えないという「子の難しさ」、およびサポートが得られずに「孤立育児」に陥ることから生じる育児不安を言及する母親もいた。これらの育児不安の内容は、日本の質的調査においても類似的

なカテゴリーが出ている（坂間，2000；清水，2003）。今後は、中国においても育児不安という概念を用いて研究を進め、そうした研究結果に基づいた育児支援を展開することが望ましい。

幼稚園機能については、「寄宿制」・「全日制」の両群とも子どもの人格、性格、社会性の発達においてポジティブな評価をしていた。母親の見た目からのみではあるが、現在の幼稚園が一人っ子の性格形成や社会性の発達を促進する機能を果たしていることがわかる。今後は、客観的に見てもそうした機能が「寄宿制」・「全日制」の両形態にあるのかどうかを検証する必要がある。母親自身にとっての幼稚園機能については、「寄宿制」と「全日制」では相違が見られた。子どもの入園後、母親の心身面の回復や夫婦関係・親子関係が良くなったと述べたのは寄宿制幼稚園児の母親のみであった。このことは、子育て機能の大部分を社会に移転させることによって、母親の育児負担が確実に軽減し、家族関係を一度リセットする機会が得られていることを表している。ファミリー・ワーク・コンフリクトが深刻化している中国の母親にとっては、寄宿制幼稚園がうまく機能していると言うことである。この結果から、日本の働く母親にとっても、育児の社会化を充実させることが育児負担を軽減することになると言える。

本研究は、母親の視点から女性の就労と育児を巡る「育児不安」と「幼稚園の機能」に関する中国の母親の心理に迫る初めての試みに位置づけられる。面接調査の結果より、今後の子育て支援における方向性が示された。しかしながら、本研究は対象地域の代表的なサンプルが抽出されたとは言えるとしても、限られた人数による質的研究であるために、一般化するには限界がある。さらに、中国の研究においては地域性の問題がつきものであり、今後は地域性を考慮し、本研究で得られた知見を手がかりに、父親の役割や寄宿制幼稚園が子どもに与える影響などを含めた量的研究へと進めていくことが課題である。そのような研究により、女性の就労と育児を巡る家族・社会のメカニズムがいつそう明確になるものと思われる。

謝辞

本研究にご多大な尽力を賜った幼稚園の関係者方、および多忙中にも関わらず快くインタビューに応じてくださった園児の保護者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

注

- (1) 親子園：近年、一部の大中都市には、主に3歳未満の幼児とその保護者向けに教育サービスを提供する「親子園」が出現している。それは、主に週末、幼稚園を地域向けに開放し、親子の活動を展開するものである（「北京における就学前教育の状況」より）。
- (2) 寄養：未成年者の子どもを持つ父母は職業・生活上の特別な理由や状況により、子どもとの共同生活が不能（困難）となる場合は、一定の期間において、子どもを他の家に預けて扶養・教育・監護してもらうことを指す。ただし、子どもの扶養に発生する費用および民事責任は父母に帰する（「中华婚育新风网」より）。寄養先は主に子どもの母方あるいは父方の祖父母の家であるが、中には親の兄弟姉妹や信頼しているほかの親戚や友人宅の場合もある。中国における子育て様式（子育てサポートシステム）の一形態と言えよう。
- (3) 郷鎮企業：日本では町・村企業と訳される。従来の農村の「社隊企業」が、人民公社制度解体後、新たに農民共同出資による経営、あるいは個人経営として設立された企業であり、1984年3月からこれらを郷鎮企業と総称するようになった。市場経済化に適応しやすい体質を持つため、急速に発展してきた。いまや中国経済で無視できない比重を占めるようになった（「経営学大辞典」より）。

引用文献

- 陳省仁（1999）．「寄養」からみた現代中国社会の家族と子育て．東洋・柏木恵子（編），社会と家族の心理学（pp. 14-22）．京都：ミネルヴァ書房．
- 服部祥子・原田正文（1991）．乳幼児の心身発達と環境　－大阪レポートと精神医学的－．名古屋：名古屋大学出版社．
- 小林登（2000）．21世紀の子育てを考えよう～NICHDの乳幼児保育研究から学ぶ～．小児科診療，**63**, 1078-1085．
- 伊藤あかね（2003）．若い成人期における女性の「焦りと迷い」に関する検討　－「女性であること」と「わたしであること」の間の葛藤に関する研究－．日本心理学会第67回大会発表論文集，1101．
- 柏木恵子（2003）．育児期女性の就労中断に関する研究　－なぜ仕事を辞めるのか？辞めるとどうなるのか？－．平成14年度埼玉県男女共同参画推進センター共同研究報告書．東京：With You 埼玉県男女共同参画推進センター．
- 柏木恵子・大野祥子・平山順子（2006）．家族心理学への招待．京都：ミネルヴァ書

房.

厚生労働省 (2002). 厚生労働省第 1 回 21 世紀出生児童縦断調査. 子育て・教育・子どもの暮らしデータ 2004. 生活情報センター発行.

牧野カッコ (1982). 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要, **3**, 43-56.

牧野カッコ・中西雪夫 (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安 —父親の生活および意識との関連—. 家庭教育研究所紀要, **6**, 11-24.

孟育群 (1998). 青少年の親子関係に関する研究. 北京: 教育科学出版社.

孟育群・李强 (2001). 青少年の良好な親子関係形成の要素とは. 教育科学, **3**, 59-61.

岡本祐子 (2003). ケアすることとアイデンティティの発達. 岡本祐子 (編著), 女性の生涯発達とアイデンティティ: 個としての発達・かかわりの中での成熟 (pp. 143-178). 京都: 北大路書房.

中谷奈美子・中谷素之 (2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究, **2006**, **17**, 148-158.

大日向雅美 (1988). 母性の研究 その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証. 東京: 川島書店.

坂間伊津美 (2000). 乳幼児をもつ母親の心理的問題と疲労 —阿見町調査から. 茨城県立医療大学紀要, **5**, 99-107.

菅原ますみ・北村則・戸田まり・島悟・佐藤達哉ほか (1999). 子どもの問題行動の発達: 生後 11 年間に縦断研究から. 発達心理学研究, **10**, 32-45.

上海市統計局 (2003). 上海には学習型家庭が 4 割超. 2006 年 3 月 1 日以下のサイトより閲覧 <http://www.Shanghai.gov.cn//shanghai/node2314/node2315/node4411/userobject21ai26331.html>

清水嘉子 (2003). 育児ストレスの実態研究 —ストレス情動反応を中心にして—. 母性衛生, **44**, 372-378.

王东华 (1999). 母親発見 (上・下). 四川人民出版社.

Wang, F. F. & Thomas, O. (1995). Quality related to intelligence among Chinese children between ages 4 to 6. *School psychology international*, **16**, 59-65.

渡辺久子 (2000). 母子臨床と世代間伝達. 東京: 金剛出版.

吴放・邹泓 (1995). The association between attachment quality and peer relationships of preschool children. 心理学報, **27**, 434-441.

——石 晓玲 大学院文学研究科博士課程後期課程——

——桂田恵美子 文学部教授——

Chinese mothers' parenting anxiety and views of preschool education

—A comparison of mothers who choose a boarding-type
and a regular-type preschools—

by

Xiaoling Shi and Emiko Kutsurada

This study explored mothers' parenting anxiety and how mothers perceived the function of preschool in contemporary China. We conducted semi-structured interviews for Chinese mothers who had a preschooler. All of them were working mothers who sent their children to the same preschool, but half of them chose a boarding-type of service (boarding group, $n=10$) and another half chose regular service (regular group, $n=10$). The interview results showed similarities and differences between the two groups. There were more self-employed parents and more children who had experienced “JiYang” (childcare in others'house separated from the biological parents) in the boarding group than in the regular group. In the regular group, more fathers had a college degree, and mothers tended to depend solely on maternal grandmothers for parenting support. The mothers in both groups had parenting anxiety that was mainly related to family-work conflict, and perceived the preschool positively for the child's personality and social development. However, only the mothers in boarding group reported their own physical improvement and better relationship with their husbands and children after sending their children to preschool. The future direction of parenting support in China was discussed.